

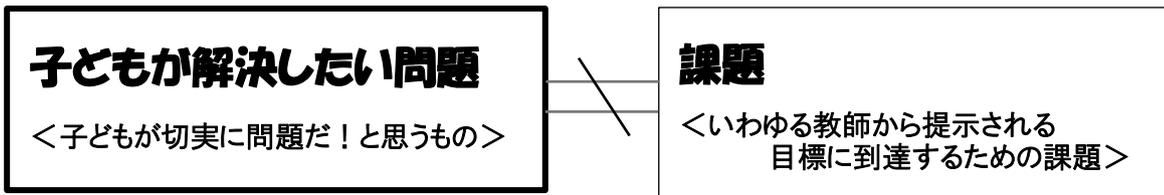
テーマ「ひびき合う 三の丸の子どもたち」

研究課題・・・子どもが解決したい問題を持ち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成
手だて・・・子どもの願いや思いの育ちを見とった単元構想と授業づくり

「子どもにとって解決したい問題が切実になった時、ひびき合うだろう」という考えから、
その学習は子どもにとって問題が本当に解決したいものであるかどうか、それに基づいてひびき合っているかどう
かに視点を当て、「ひびき合う 三の丸の子どもたち」をめざしている。

子どもが解決したい問題とは・・・

簡単な意味での「解決したい」ではなく、それまでの経過を踏まえて思いを膨らませ、その問題に対して主体的
に向き合う問題であり、子どもが「本当に解決したい」と問題がより切実になっているものである。この問題はいわ
ゆる教師から提示される目標に到達するための「課題」ではない。以下のような「3つの条件」を満たす。



・研究では問題を追究する過程を授業で実現する。

問題が切実になる3つの条件

- ① 事実に基づく問題←(いつも確認するもの)
- ② 多様な、あるいは異質な考えや立場に出会う・知ることができる問題
- ③ 葛藤を内にもつ(＝モヤモヤした自分の考えがはっきりしない状態)
単純に(どうしたらよいか)自分で判断できない問題

問題が切実になるほど ひびきあう

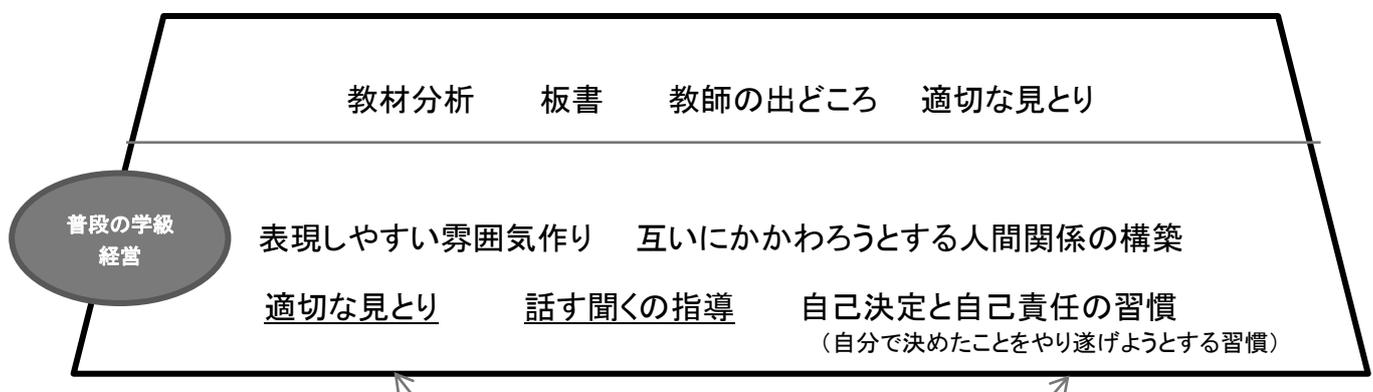
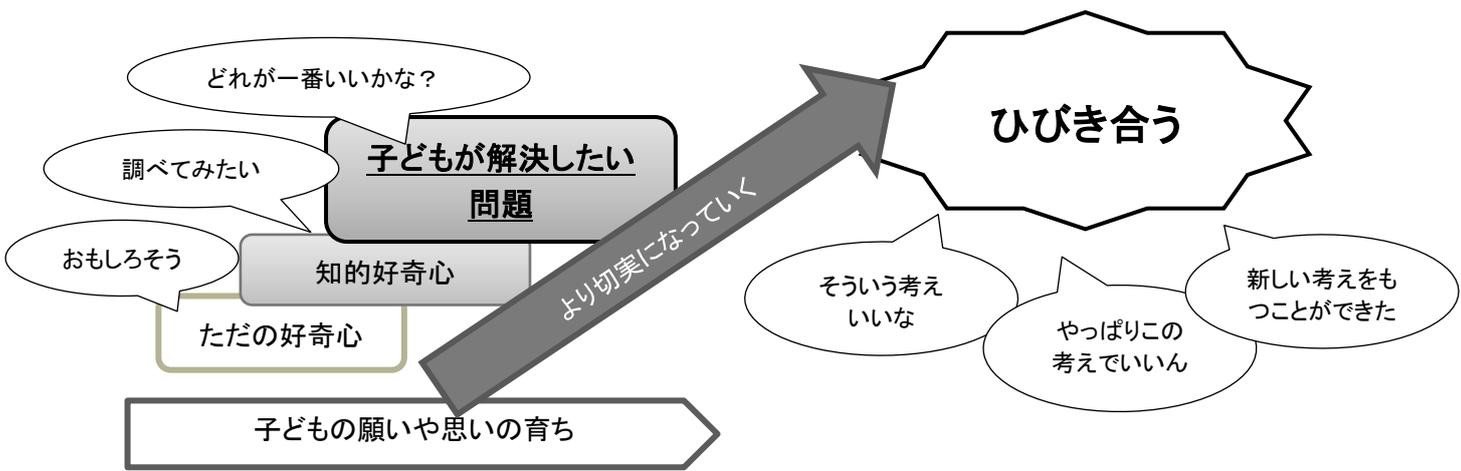
ひびき合う姿とは・・・

ひびき合い＝みんなで関わり合いながら、よりよいものをめざし、
よりよいものを築き上げていく姿。
目に見える、または目に目ないけど、単元のねらいにより近づく心の変容(「強化」「変化」「統合」)

ブロックテーマ(どんな姿が見られたらよいか)

低学年	中学年	高学年	個学
感じる心、 素直に表現する自分 ・人の言動に何かを感じる姿 ・自分の思いや他者からの刺激 に対し、素直に表現する姿	追究する力、 仲間と支え合う自分 ・自分の問題をとことん追究 する姿 ・仲間と協働して追究する姿	仲間への理解、 自立する自分 ・仲間を理解しつつ、自分の思い も大切にする姿 ・新しい価値観にふれ、自分を再 構築する姿	感じる心、 気持ちを伝える自分

研究構想図



※吹き出しは、一例です。

ひびき合う子どもたちを支えるもの

自分が問題に思っていることや関心のあることに
 自ら人と関わり合い、話し合いながら、よりよいもの
 を作り出したり、問題を乗り越えたりする人間の育成



街づくりを支える大人へ



(1) 研究課題と手だて設定の理由

本校の児童の実態として、安定した家庭環境の中で育ち、与えられる課題には素直に取り組む良い子が多い。勉強しようという気持ちがあるよさがある一方で、仲間と協働する意識が薄く、互いに学びあい、自らより良いものを生み出したり、追究したり、解決したりという「学ぶ」力に欠ける。小田原の中心地に住む三の丸の子どもたちは、小田原の未来を担う子どもたちであり、未来を創る子どもたちである。学校教育目標にも文言があるとおり、その「地域で学び 響き合う たくましい子ども」を育てることが求められているのである。

そこで、本研究では、自分が問題を持ち、その問題に対し、「みんなで追究したい」そのために「友だちの意見を聞きたい」「自分の考えを伝えたい」という気持ちをもって学習の場に臨む子どもたちを目指したい。そして、その学びの過程で、自分を変化させたり、新しいことを発見したり、考えを深めたりする姿に到達することを目指す。

子どもたちが本当の意味で「ひびき合う」には、そこまでの思いと願いの育ちから生まれる「問題」が切実になっている必要があると考える。そうした子どもたちの学びの過程を大切にするために、

- ①何と出会い、子どもの思いや願いをどう育て、どのように問題を子どもと創るか
- ②どのような学びの可能性があるのか
- ③どこで、どのようにひびき合いの場をつくり、ねらいに到達させたいか

といった**学びの道筋＝指導の道筋を記す「単元構想づくり」**を今年も手立ての一つとして大切にしていこう。単元構想は、子ども実際の学びと共に、変化のあるものである。子どもの思考過程が予想と違うことがある。その時の**子どもの思考過程に寄り添い、問題に思っていることはなんなのか**を捉え、単元構想に**加除・修正を加えながら、子どもと共に授業を創っていく**ことを目指す。

学びの道筋は、子どもが違えば、同じ単元でも同じ道筋をたどることはない。学級経営、担任、子ども…いろいろな要因がその時その時で異なれば、道筋も異なる。「こうすればこのようになる」という方法論的な研究ではなく、子どもの出方に対し、教師である自分が何をし、主体的な問題解決学習を実現させるのかは、互いに実践を見合う中で、また自分で実践を重ねていくうちに、自分なりの方法を見つけていくものである。

(2) 研究方法

- ・研究授業(参観&実践)、学級経営検討会の開催
- ・全体研 年間3回 一名ずつ
- ・1人1回授業公開
- ・全体研3回とブロックの授業5回(4回)は必ず見に行く。

今年は、年間で校内研究日を設定し、年度当初にどこで授業公開するかを決定する。公開日はずらすことは基本的にはしない。

事前に、打ち合わせの時間に、

- ①「子どもが、どんな思いで、どのような問題に向きあっているのか」
 - ②「どのようなひびき合いの姿をめざしているのか」
- を職員に話す。

- ・研究同人の参加・小林先生による指導・助言による研究の深化
- ・ブロック研の研究授業についての指導案検討は、ブロックや学年で行い(必要に応じて回数や時間をとってください)、よく検討する。

① 学級経営検討会

「ひびき合う」ために必要な土台づくりを重視し、「話す・聴く」のルールづくり(資料②)、互いにかかわりあおうとする関係づくり(資料③)、自分の思ったことを表現できる雰囲気作り、粘り強くやり遂げる習慣などについて、学級経営検討会で、話し合いをしていく。具体的な子どもの名前を挙げながら、具体的な方法を紹介し合いながら研鑽をし、土台作りをしっかりとできるようにする。

② 単元構想づくり<資料⑤>

- ・一度全員で、単元構想づくりについての研修をする。
- ・どこの場面なら、子どもが問題が切実になるのか、追究し、ひびき合うのかを、学年またはブロックでよく相談する。
- ・事前に(前もって)自分で作ってみて、学年やブロックで検討し、授業に臨む。
- ・授業では、指導案+単元構想+本時案・座席表

③ みとり

- ・**単元構想時**単元(もしくは年間)を通して、何人かを詳しく見とる。この子については、具体的な記録を取ったり(行動観察、成果物からの記録、写真)、学年やブロックでも普段から情報交換したりする。
- ・**単元構想時**どんなことが、目の前の子どもにとって切実な問題になりそうか、普段の学級での様子、興味関心などをよく見とって単元構想を描いていく。
- ・**本時に向けて**本時案には2~3人くらい抽出し、その単元の中での子どもの思いや期待する変容・ひびき合う姿を詳しく書けるようにする。<ただ、書かなくても、そのような見とりができるだけ多くの子に対してできるようにスキルアップを目指す>
- ・**本時に向けて**本時案に書く子は、本時で、ひびき合っていたかを見とるための視点となる子である。
「ひびき合いによって変化を期待したい子」
「ひびき合うために、支援を必要とし、気になっている子」
- ・**本時**「各ブロックのテーマ」と、昨年度作成してきた「ひびき合う姿を具体的にみとるために」(資料①)を参考にしながら、ひびき合いの姿をみとっていく。

<みとりの3点セット>→座席表に書くようにします。(座席表の書き方は後日提案)

- その子の前時までの姿。(★これまでの学習や生活の様子、★単元に入ってからの様子)
- 単元・本時に願う子どもの姿
- ②を実現するための具体的な手立て

④ 授業研究

- ・基本的には、国語、社会、算数、理科、生活、総合、生活単元学習。ただ、「ひびき合う姿」をどの教科でも実践できていくことが、研究が普段の教育活動に生かされることにつながるので、他の教科・領域でも提案できる。
- ・子どもたちが切実な問題を解決していこうと、友だちとひびき合う場面をみあえるようにする。(必然的に導入はない)個学は実態に応じて、好奇心を喚起する場面や導入でもよい。

⑤ 授業研究の視点

- ★子どもにとって解決したい問題が切実になっていたか。
- ★ひびきあっていたか。
- ★それを支える(みとり、学級経営、話す・聴くの指導、自己決定と自己責任の習慣、教材分析、板書、教師の出どころ)は、適切だったか？

の3つを中心に話し合う。話し合いは、授業での子どもの言動をよく観察し、発言・反応・活動・表現物から見とったことを話し合えるようにする。そのために、一人ひとりが授業記録や写真を取って話し合う。**抽出見は、ブロックの人で記録を取り**、研究協議で見とったことをもとに話すようにする。協議記録は分かりやすく、まとめる。

<本年度の研究の重点>

- ★「三の丸の子の実態」や「国の施策」と本校の研究のつながりを探る。
実態については、職員が日々感じている児童の実態を出し合い、集約するとともに、学情の分析結果を加味できるようにする。また、国の施策については、文部省から出ているリーフレットにや文献から抜粋し、共通理解をした上で本校の研究意義をまとめる。
- ★ 職員ニーズである「見とり」について、研鑽できるような機会を研究の中に設ける
普段、どんな風にも子どもを見とっているかを、A41枚程度で実践をもちより、情報交換する。子どものことをメモしたものや、写真資料、記録簿、ノート指導での記録などが考えられる。

(3) 研究組織

低学年ブロック	中学年ブロック	高学年ブロック
岩本 中村 竹内	竹澤 長山 宇根	岩永 柴田 土屋
内田 原 伊瀬谷 教頭	垂水 若林 山崎	譲原 山本 武井 校長
足立 藪田 府川 田中	常盤 鈴木淳	東間 物部

(4) 研究日程

日程		具体的な内容
4月 22日	第1回校内研全体会	研究の概要の提案 全体研の授業者決定
5月 20日	第2回校内研全体会	①児童の実態を考える ②今後の教育の動向、考え方を理解する ③単元構想の作り方 ④協議の仕方
6月 3日	学級経営検討会①	学級経営検討会のねらい 学年・ブロックでの学級経営についての検討。 YP から学級の子どもたちを見る
6月 10日	第3回校内研全体会	・研究授業 ①単元を創るまで(自評) ②研究協議 ③指導案・本時案の書き方の確認 ・全体研以外の方の授業日程決定
7月 3日	学級経営検討会②	・異学年ブロックで構成されたグループでの学級経営検討
7月 26日	第5回校内研全体会	「子どもをみとる」ことについての勉強会
9月～12月	各ブロック研	
10月 12日	第5回校内研全体会	研究授業 小林先生来校 ()プロ ()

12月 1日	第6回校内研全体会	研究授業 小林先生来校 ()プロ ()
1月 18日	第7回校内研全体会	研究授業 小林先生来校 ()プロ ()
2月 7日	学級経営検討会③	・学級経営(ひびきあいを支える土台作り)の実践報告会
2月上旬	研究紀要まとめ	
3月 3日	第7回校内研全体会	年間反省、次年度の方向

※本年度は、研究日が重ならないように、夏休み前に各ブロック1本の研究授業行うようにする。また、日程を早めに調整し、決定した日程に必ず行えるように見通しを持って計画する。

(5)まとめ方(冬休み明け詳細)

昨年度までと同様HPに載せます。研究授業での実践(単元構想、本時案、本時の様子、研究の成果と課題)のみです。